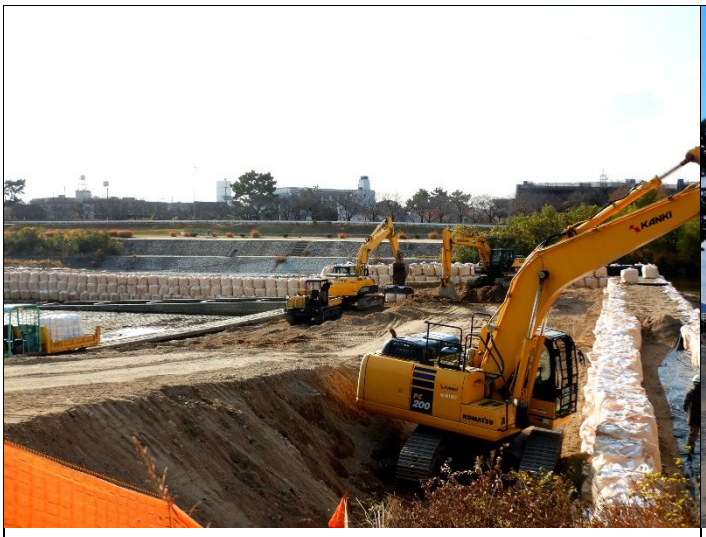
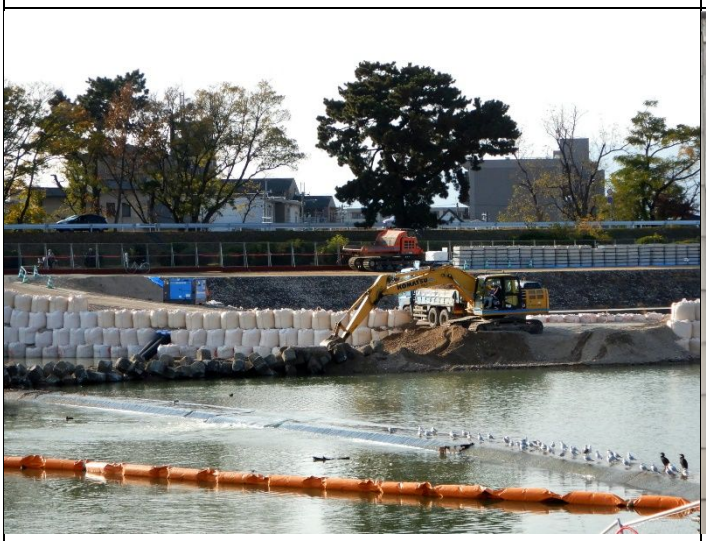


３堰改修工事現場　熱心に見入る人の姿に関心の深さ感じる

河床掘削が進む１号堰下流



掘削範囲が広くなりオイルフェンスで濁水防止する１号堰

小曽根工区に設置された動画ディスプレー

鳴尾義民の碑

義民の犠牲の下に出来た、北里用水取水口（西宮市史跡）

枝川は、弘治３年(1557)の氾濫により形成された。万治２年（169）には『戸崎切れ』と呼ばれる大洪水が起き、武庫川と枝川の分岐点付近の堤防が約 500mにわたって決壊。鳴尾に流れ込んだ膨大な土砂が、かつては海か、せいぜい浅瀬に砂州がある程度の場所（現在の旧国道以南）が陸地になった。武庫川から枝川が分流し、枝川が通過する瓦林村では、水害から村を守るため堤防を築き、下流の鳴尾村は水路を遮断され、大旱魃に襲われた天正 19 年(1591)水争いで多数の死傷者が出た。武庫川は、昭和３年の大改修と治山対策は進んだとはいえ、河床勾配は急で、流路が不規則で平水量少なく水枯れすること毎年４ヶ月に及んだといわれる性格に変わりはない。兵庫県では、各河川における想定最大規模降雨が 1/1000 年確率以上になるよう設定しているが、戸崎切れ同様の大洪水がいつ起きるかも知れず、不断の保守・改修工事は欠かせない。